

あとがき

環境教育とは、環境問題を取りあげて学習することになりますが、環境の範囲とその捉え方が問題です。

今まで環境問題は社会環境と自然環境を総括した、人口、資源、開発、生活環境といった面からとりあげられてきました。現在は、オゾン層破壊、地球の温暖化、酸性雨（霧）、海洋汚染、熱帯林や野生生物の減少、砂漠化などといった地球レベルの問題が話題となっています。

一方、市民運動としては、地域の河川や湖沼、海岸などの浄化や美化の運動や牛乳パックや食品トレー、空カンなどの回収運動などリサイクル運動が盛んに行なわれています。

環境問題を原点で考えてみると、人間が生きて行くこと自体すべて環境にかかわっているといえます。生物は基本的には個体の遺伝子を残すために行動していることを考えた時、エゴイズムのかたまりのようなものだと思います。ツバメのような小鳥は巣の外へふんをするし、タヌキもためふんといって外でふんをして、まわりの環境をよごしています。人間も顔を洗い、着る物を洗い身ぎれいにしているということはそれだけ環境をよごしていることとなります。家庭の屋内を快適にすればそれだけまわりの環境を悪くすることとなります。家庭が地域になり、地域が国となり、現在のように地球レベルの問題に波及してきます。このように捉えるとすべてが環境問題だということとなります。

もう一つの視点として環境は主体によってその捉え方が違ってきます。森の木を育てそれを伐って生活している森の樵と、その森を見、そこを遊び場やいこいの場としている人達とではその森に対する考え方が違って来るのは当然なことだと思います。人の田畠の作物や草花を私達が毎日見て楽しんでいるのだから収穫や草花を採らないで欲しいということは一方的な見方、考え方となります。また森には人間の利害関係とはかかわりないリスも棲んでいます。

環境問題はこのようにいろいろとむずかしい問

題を含んでいます。環境教育学会はこれらの広範囲にわたる環境問題を取りあげて行かなければならないと思っています。学会誌「環境教育」には研究も実践報告も提言もあってほしいと思います。

学会誌はなるべく片寄ることのないよう、自然科学分野も社会科学分野もバランスよくとりあげて行くのが理想です。広い範囲の方々からの投稿を期待しております。どうぞよろしく願いいたします。

山田卓三

編集委員

委員長

山田 卓三
加藤 憲一
金森 正臣
狩山 廣子
北野日出男
木俣美樹男
鈴木 善次
杉浦 嘉雄
東原 昌郎
米田 健

日本環境教育学会 賛助会員

1. 小学館 担当：中野早苗（教育編集部長）
〒101-01 千代田区一ツ橋 2-3-1
Tel.03-3230-5541
2. (財)日本児童教育振興財団 担当：同財団事務局
〒101-01 千代田区一ツ橋 2-3-1小学館ビル
Tel.03-3230-5154~9
3. 株式会社日本マンパワー 担当：平木真（開発企画部）
〒107 港区赤坂 4-8-14
Tel.03-5411-2570
4. 大倉一夫 Tel.0725-56-8224
〒590-02 和泉市光明台 1-25-1
5. 山崎光巧 Tel.0742-44-1508
〒631 奈良市塚塚山南3丁目 1-25